源氏物語でのザリキ形・ザリツ形・ザリケリ形

——否定表現におけるテンス・アスペクト——

西 田 隆 政

Zariki-form, Zaritsu-form, Zarikeri-form in *The Tale of Genji*

——Tense- Aspect in Negative Expression——

NISHIDA Takamasa

Abstract : It is generally known to us that the classical Japanese language had more various word forms which condition the Tense-Aspect than the modern one. That is limited, however, to the affirmative expressions, and when looking into *The Tale of Genji* there are only three examples of Tense-Aspect in the negative situation, i.e. Zariki-form, Zaritsu-form and Zarikeri-form. In this paper it is examined how these forms are properly chosen. As the result, it has become clear that Zariki-form shows a negative situation at a time of the past, Zaritsu shows the ending of a negative situation which has continued from the past and Zarikeri the reconfirmation, with deep emotion, of the past negative situation. Moreover, Zatrikeri can show a negative situation continuing at present, as well as the possibility of a negative situation that will continue from now on. Also, Zarikeri, while it is based upon the emotional feeling, can be said to have a role to show those Aspectual meanings which cannot be shown by neither Zariki nor Zaritsu.

要旨：古典語においては，現代語と比較すると，テンス・アスペクトをになうとされる語形が多様であることがしられている。しかし，それは，いわゆる肯定表現のばあいに限定されるもので，源氏物語での否定表現においては，ザリキ形・ザリツ形・ザリケリ形の3つの語形しか存在しない。本稿では，これらの語形が，どのようにつかいわけられているのかを検討した。その結果，ザリキ形が過去の時点における否定的事態を，ザリツ形が過去から継続していた否定的事態が終了したことを，ザリケリ形が話し手の過去の否定的事態に対して「感慨」をまじえて再確認することを，それぞれしめしていることがあきらかとなった。そして，ザリケリ形では，現時点まで否定的な事態の継続していたことや，現時点以降も否定的な事態の継続する可能性のあることをしめすこともありうる。ザリケリ形は，ムード的な意味を基本としながらも，ザリキ形やザリツ形ではしめしにくいアスペクト的な意味をしめす役割をになっているとみることもできるのである。

1 はじめに

古代日本語における，テンス・アスペクトをになうとされる助動詞には，多様な語形が存在する。テンスのキ・ケリ，アスペクトのツ・ヌ・タリ・リである。さらに，それらの複合形である，ニキ，テケリ，タリケリなどの存在ともあわせてかんがえると，タのみしか存在しない現代語比較して，その多様性はきわだっている。

しかし，それは，あくまで肯定表現のなかだけでのことである。否定表現についてみると，その状況は一変する。否定のテンス・アスペクトに関する語形は，否定の助動詞ズのアリ系の活用とされるザリに，キ・ケリ・ツの下接するものしか，使用例が存在しないからである。

本稿では，その使用状況の一端を検討するために，源氏物語におけるのこれらのザリ形による否定表現での使用例をみていくことにしたい。

2　使用形と用例数

源氏物語のザリの使用数は，641例である[1]。以下，複合形ごとの使用形と用例数をあげる。

ザラ：179例
ザラナム（終助詞）：6例
ザラマシ37例（ザラマシカ：15例・ザラマシ（終止）：19例・ザラマシ：（連体3例）
ザラム：136例（ザラム（終止）：4例・ザラム（連体）：119例・ザラメ：13例）

ザリ：405例
ザリキ：152例（ザリセ：1例・ザリキ：15例・ザリシ：111例・ザリシカ25例）
ザリケム：22例（ザリケム（終止）：7例・ザリケム（連体）：12例・ザリケメ：3例）
ザリケリ：178例(ザリケリ：43例・ザリケル：106例・ザリケレ：29例）
ザリツ：46例（ザリツ：3例・ザリツル：35例・ザリツレ：8例）
ザリツラム：3例（ザリツラム（終止）：2例・ザリツラム（連体）1例）
ザリツルナリ：1例（ザリツルナリ：1例）
タラザリキ1例（タラザリシ：1例）
ラ（完了リ）ザリキ：2例（ラザリシ：1例・ラザリシカ1例）

ザル：56例（ザ（ン）形50例をふくむ）
ザルベシ：6例（ザルベシ：5例・ザルベケレ：1例）
ザナリ：13例（ザナリ：2例・ザナル：5例・ザナレ：6例）
ザメリ：35例（ザメリ：15例・ザメル：14例・ザメレ：6例）
ザメリキ：1例（ザメリシ：1例）
タラザメリ：1例（タラザメレ：1例）

ザレ：1例
ザレバ：1例

つぎに，参考として，否定の助動詞ズの連体形ヌに連体ナリが下接する例をあげる。なお，これらには終止用法の使用例しかない。

ヌナリ：8例　ヌナラム：2例　ヌナリケリ：11例
ヌナルベシ：10例

以上にあげた，ザリに助辞の下接する複合形の問題点として，以下の6点が指摘できる。

①ザリヌ（完了ヌ）の使用例が（ヌラム・ヌベシ等もふくめて）ないこと。
②ザリタリの使用例が（タリケリ・タルベシ等もふくめて）ないこと。
③（テケリ等の）テンス・アスペクト系の複合形の使用例がないこと。
④ザルラムの使用例がないこと（ザラム・ザリケムはある）。
⑤ムード系の複合形の使用例もザメリキ1例のみであること。
⑥ザルベカリ・ベカラザリの使用例がないこと（ザルベシ・ベカラズはある）。

以上6点のうち，本稿で注意されるのは①と②と③である。ザリに下接するテンス・アスペクト系の助動詞がかぎられていることと，複合形での使用例がないことにより，否定表現におけるテンス・アスペクトの表現形式が，肯定表現と比較すると，圧倒的に少数となっているのである。

それを提示すると以下のようになる。

	肯定	否定
基本形	終止形	ズ
テンス	キ	ザリキ
	ケリ	ザリケリ
アスペクト	ツ	ザリツ
	ヌ	φ
	タリ	φ
	リ	φ
複合形	テキ	φ
	ニキ	φ
	タリキ	φ
	リキ	φ
	テケリ	φ
	ニケリ	φ
	タリケリ	φ
	リケリ	φ
	ニタリ	φ

肯定表現と否定表現とで対応形があるのは，基本形とザリキ形・ザリケリ形・ザリツ形のみで，ほかの例では否定表現の側に対応するものがない。この点からすると，多様とされる古代語におけるテンス・アスペクト系の表現も，否定表現においては，非常にかぎら

れたものとなっていることが理解される。

そこで，3章以下では，これらのザリキ形とザリツ形，さらにザリケリ形がどのように使用されているのかを，具体例に即して検討していくことにしたい。

3　ザリキ形とザリツ形

まず，ザリキ・ザリツ両形の使用例がある動詞の例から検討する。動詞「きく（聞く）」の例である。前後の文脈もあわせて検討するために，ある程度のまとまりで引用する。また，説明の便宜のために，現代語訳も付した。

[1] うつし人にてだに，むくつけかりし人の御けはひの，まして世かはり，あやしきもののさまになりたまへらむをおぼしやるに，いと心うければ，中宮をあつかひきこえたまふさへぞ，このをりはものうく，いひもてゆけば，女の身は，みなおなじ罪ふかきものゐぞかしと，なべての世のなかいとはしく，かのまた人もきかざりし御なかのむつ物語に，すこしかたりいでたまへりしことをいひいでたりしに，まことおぼしいづるに，いとわづらはしくおぼさる。（「若菜下」1189–7）[2]

（現代語訳）[3]

現世の人であってさえ，不気味であった人のご様子の，まして（死んで）世がかわり，あやしい物の姿になっていらっしゃるだろうことをおもいやりなさるに，非常につらいので，（秋好）中宮をお世話申しあげることさえが，この際は気がすすまず，いいつのっていくと，女の身は，みなおなじ罪ぶかい根源なのだと，すべての男女のなかがいやなもので，あのまた人もきかなかった（紫上との）おふたりなかの睦言で，（六条御息所のことを）すこしかたりだしたことを（物怪が）いいだしたのに，たしかにとおおもいだしになるに，非常に厄介におおもいになる。

[2]「はじめより，さらに守の御むすめにあらずといふことをなむきかざりつる。おなじことなれど，人ぎきもけおとりたるここちして，いでいりせむにもよからずなむあるべき。ようも案内せで，うかびたることをつたへける」とのたまふに，いとほしくなりて，「くはしくもしりたまへず。女どものしるたよりにて，おほせごとをつたへはじめはべりしに，なかにかしづくむすめとのみききはべれば，守のにこそは，とこそおもひたまへつれ。こと人の子もたまへらむとも，とひききはべらざりつるなり。かたち心もすぐれてものしたまふこと，母上のかなしうしたまひて，おもだたしうけだかきことをせむと，あがめかしづかるときはべりしかば，いかでかの辺のことつたへつべからむ人もがな，とのたまはせしかば，さるたよりしりたまへりと，とり申ししなり。さらに，うかびたる罪はべるまじきことなり」と，腹あしく，ことばおほかるものにて申すに，……　（「東屋」1797–4・11）

（現代語訳）

「はじめから，まったく守の（実の）娘でないということをきいていなかった。（婿であるのは）おなじことであるが，人ぎきも一段おとったここちがして，（屋敷に）出入りしようにも（体裁の）よくないことだ。よくも調査しないで，うわついた話を（わたしに）つたえたものだ」とおっしゃると，こまってしまって，「くはしくもしっておりません。女どものしるたよりで，（婿にとの）おことばをつたえはじめましたところ，大勢の中で大事に世話する娘とだけききまして，守のにこそは（ちがいない），とおもっておりました。ほかの父親のこどもをもってられるだろうとも，たずねかなかったのです。（浮舟の）容貌や心もすぐれていらっしゃること，母上のかわいがりなさって，世間に自慢できるような身分のたかい人との婚姻をしようと，あがめ大事にしているとききましたので，さるたよりをしっていらしたと，とりつぎ申したのだ。けっして，いい加減なとの罪がございますようなことはないのだ」と，おこりっぽくことばのおおい者で（あれこれと）申すと，……

[1] と [2] の例から，ザリキ形とザリツ形のちがいをみることができそうである。まず，[1] は，光源氏が六条御息所のことをふりかえってかんがえている例である。紫上を病にくるしめたのは，自分と紫上とのふたりだけの第三者が「きかなかった」はずの睦言を，御息所がきいてうらみにおもったからとふりかえっている。

睦言であるから当然ほかの人はきいたはずもない。しかし，現世の人でない御息所のしるところとなった。この「きかざりし」は，過去の時点で話を「きかなかった」と，あきらかに過去のある時点での事態を意味している。光源氏が心中でふりかえっている物語の現時点からして，過去のできごとであることをのべていることになる。

それに対して，[2] のザリツは，過去の事態を現時点と関連させるかたちでとらえている例である。浮舟との縁談をのぞんでいた少将が，彼女が常陸介の実の娘でなく現在の妻の連れ子であることをしって，立腹して，仲介者をせめ，また，仲介者もそれに反駁している。

少将は縁談の当初から娘が守の実子でないことをまったく「きいてなかった」と主張する。「はじめより」と時点をあらわす副詞が共起していることからも理解されるように，この話を最初からきいていない，そして，逆にいまの時点では，その事実をしったということが意識されている。縁談をすすめている当初はしらなかったものの，いま問題にしている時点の直前からは，その事実をしり，愕然としているというものである。

一方，それに対する仲介者の反論は，大事にしている娘ということで実子だとおもった，それで，ほかの人が父親である娘をもっているとは「といきかなかった」のだと，自分に落ち度はないとする。仲介者も当初はきいていなかったが，現時点ではすでに知識としてきいている。直前の「おもひたまへつれ」も同様で，実子だと「おもった」のは過去のことで，いまは実子であるとは「おもっていない」のである。

この点からすると，「きかざりき」とザリキ形を使用するばあいは，現時点からすると過去の事態であること指摘するのに対して，「きかざりつ」とザリツ形を使用するばあいは，単なる過去の事態ではなく，現在はすでにそのような否定された事態は解消して，いまとなっては否定された事態が存在しないだけでなく，まったく逆の事態となっていることをしめしている。ザリキ形とザリツ形では，過去の否定的事態をしめすのは同様であるものの，あきらかに，現時点との関係のあり方がことなっているのである。

つづいて，「きく」に対応する，「はなす」意味の謙譲語動詞「きこゆ」の例を検討する。

[3]　**はじめより** 懸想びてもきこえたまはざりしに，ひきかへし懸想ばみなまめかむもまばゆし，ただふかき心ざしをみえたてまつりて，うちとけたまふをりもあらじやは，とおもひつつ，さるべきことにつけても，宮の御けはひありさまをみたまふ。みづからなど，きこえたまふことはさらになし。　（「夕霧」1309–6）

（現代語訳）

はじめから色めいても申しあげなさらなかったところで，うってかわって色めいてあだっぽくふるまうのも，気はずかしい，ただ（自分の）ふかい気持ちをおみせ申しあげて，うちとけなさるおりもないだろうか（いやあるはずだ），とくりかえしおもい，しかるべきことにかこつけても，（落葉）宮のご様子態度をご覧になる。（宮は）自分自身で，（お返事）申しあげなさることはまったくない。

[4]「心うく，などか，かくとも **つげたまはざりける** 。院にもうちにも，あさましく，ことしげきころにて，**日ごろも** えきこえざりつるおぼつかなさ」とて，ありし方にいりたまふ。

（「総角」1653–4）

（現代語訳）

「情けなく，どうして，こんなに（わるい）ともつげなさらなかったのか。院にも内裏にも，あきれるほど，行事の繁忙なころで，ここ数日もお見舞い申すことができなかったもどかしさ」と（薫は）いって，（前にたずねたとき）いた部屋におはいりになる。

[3] と [4] は，「きこえざりき」と「きこえざりつ」の例である。[3] では，夕霧が友人の柏木の死後，その未亡人である落葉宮をたずねる例で，最初から色恋の気持ちで訪問していなかったのを，いまさらそれを表にだすのも気はずかしく，誠意をしめすことで落葉宮に気持ちをしってほしいと，夕霧はかんがえている。

この例で注意すべきは，副詞「はじめより」である。[2] の「はじめより」は，現在との対比でいまは事実を聞いたが，「はじめより」は聞いてなかったとするものである。それに対して，[3] では現在と対比しての「はじめより」ではあるものの，[2] では現時点でも夕霧はそのお見舞いのような態度をかえずに色恋の気持ちはだしていない。その点で，この「きこえたまはざりし」は「はじめより」もそうで現在もそうであるということになる。ザリキ形では，ザリツ形のように現時点では過去に否定された事態がもうすでに終了しているのではなく，過去の時点での否定的事態が存在したことに重点があり，それが現在どうであるのかというのは，結果としてあらわされる意味にすぎないのである。

[4] は，薫が宇治の大君を見舞いにいく例である。「日ごろ」と，ここしばらくたずねなかったことをわびているが，いまようやく見舞いにいけたことで，「きこえざりつる」もどかしさが解消できたことになる。そして，現時点では，見舞いのできた結果，お話

を申しあげることができて，「きこえざりつる」ではない状況となったわけである。

[3] の「きこえざりき」が過去の時点での事態をしめしているのに対して，[4] の「きこえざりつ」は過去の時点での否定的事態がいまの時点ですでに解消し，過去と現在とが対比的にのべられているのである。

[5] と [6] は，「しらざりき」「しらざりつる」の例である。

[5] 宮は，いつしかと御文たてまつりたまふ。山里には，たれもたれもうつつのここちしたまはずおもひみだれたまへり。さまざまにおぼしかまへけるを，色にも いだしたまざりける よと，うとましくつらく，姉宮をばおもひきこえたまひて，目もみあはせたてまつりたまはず。しらざりしさまをも，さはさとはえあきらめたまはで，ことわりに心くるしくおおもひきこえたまふ。

（「総角」1620–6）

（現代語訳）

宮（匂宮）は，はやくはやくとお手紙をおだし申しあげになる。（宇治の）山里では，だれもだれもが現実の気持ちがなさらなくておもひみだれていらっしゃった。（薫が）あれやこれやとたくらんでいられたのに，顔色にもおだしにならなかったことよと，いやでつらく，（中君は）姉宮のことを気づかいなさって，目もみあわせ申しあげなさらない。（大君は）しらなかった事情をも，はっきりと弁明なさることができなくて，無理ないと心ぐるしくおもひ申しあげなさる。

[6]「年ごろは，世にやあらむともしらざりつる人の，この夏ごろ，とほきところよりものしてたづねいでたりしを，うとくはおもふまじけれど，また，うちつけに，さしもなにかはむつびおもはむと，おもひはべりしを，さいつころきたりしこそ，あやしきまで昔人の御けはひにかよひたりしかば，あはれにおぼえなりにしか。形見など，かうおぼしのたまふめるは，なかなかなにごとも，あさましくもてはなれたりとなむ，みる人々もいひはべりしを，いとさしもあるまじき人の，いかでかはさはありけむ」とのたまふを，夢かたりか，とまできく。（「宿木」1755–2）

（現代語訳）

「長年の間は，この世にいるのだろうかともしらなかった人が，この夏ごろ，とおい地方から上京してたずねだしたのを，うとくはおもうはずはないものの，また，いきなりに，そのようになにも親しくすることもあろうか（いやその必要もあるまい）と，おもっておりましたのに，さきごろきたのが，ふしぎなほどまで昔人（大君）のご様子にそのままだったので，しみじみなつかしくおもえました。形見などと，このように（わたしを）おおもいになりおっしゃるようなのは，かえってどの部分も，お話にならないほどにていないと，（わたしを）世話する人々もいっておりましたが，さほどそのようにもある（にている）はずのない人が，どうしてかはそのようであったか」と（中君の）おっしゃるのを，夢の話か，とまで（薫は）きく。

[5] では，匂宮が中君との逢瀬ののち，文をおだしになるが，宇治の山里ではだれもが呆然とした状況で，とりわけ，姉の大君は，妹中君に自分のしらなかった薫の思惑をなにも説明することもできず，心ぐるしくおもっている。ここでの「しらざりし」は，過去の時点で薫の思惑を大君がしらなかったことをしめしている。この思惑については，現時点でも，大君は明確にしっているわけではないが，この「しらざりし」では，過去の時点で大君が「しらなかった」ということに重点をおいたものとかんがえられる。

[6] では，中君が薫に自分の異母妹である浮舟のことを紹介している。いままでずっと，存在自体をまったくしらなかった浮舟であるが，いま対面してみると，なき大君そのままであるのにおどろいている。ここでは，いままでしらなかったのが，つい最近しったというのが重要である。「しらざりつ」のばあい，しらなかったという過去の事態と対比されることで，現在しったということがしめされている。

この動詞「しる」のばあいでも，さきの「きく」「きこゆ」と同様に，ザリキ形とザリツ形は，過去の時点での否定的事態をしめすものと，現在との対比を意識して過去には否定される事態であったのが，その事態が終了していまは肯定される事態になっているもの，という相違点があるとかんがえられる。

以上，[1] から [6] までの 3 組のザリキ形とザリツ形の比較から，両者には意味上の相違点のあることがあきらかになった。いずれも過去の時点での否定的事態をしめすことは同様であるものの，過去の時点での事態をしめすザリキ形と，現時点かその直前まで継続していた過去の事態がすでに終了したことをしめすザリツ形というちがいである。これをふまえて，4 章

では，ザリケリ形の使用例についてみていくことにする。

4　ザリケリ形の問題点

3章でみたように，ザリキ形とザリツ形については，対応するようなかたちでの意味のちがいがあるとかんがえられる。それでは，ザリケリ形については，どうであろうか。

助動詞ケリ自体の意味には，膨大な研究史の蓄積があり，近年ではケリにはテンスの意味はなくもっぱらムードの意味をもつものとする説も提起されている[4]。その点からすると，ザリケリ形の意味も，ザリキ形・ザリツ形とどのように関係づけられるのかは注意されるところである。

以下にあげる，[7]［8］［9］は，3章でとりあげた，動詞「きく」「きこゆ」「しる」での，ザリケリ形の使用例である。

[7]「さても，かくその世の心しりたる人ものこりたまへりけるを，めづらかにもはづかしうもおぼゆることのすぢに，なほかくいひつたふるたぐひやまたもあらむ。年ごろ **かけても** ききおよばざりける」とのたまへば，「小侍従と弁とはなちて，またしる人はべらじ。ひとことにても，またこと人にうちまねびはべらず。かくものはかなく，数ならぬ身のほどにはべれど，夜昼かの御かげにつきたてまつりてはべりしかば，おのづからもののけしきも見たてまつりそめしに，御心よりあまりておぼしけるときどき，ただふたりのなかになむ，たまさか御消息のかよひもはべりし。……

（「橋姫」1538–5）

（現代語訳）

「それにしても，このようにその当時の事情をしった人ものこっていらしたのに，普通でありえないことにもはずかしいともおもえることの事情に，やはりこのようにいいつたわるたぐいの人はまたもあろうか（いやあるにちがいない），長年ちかっても（わたしは）ききおよばなかった」と（薫が）おっしゃると，（弁の尼）「小侍従と（わたし）弁をのぞいては，もうしる人はございますまい。一言でもまたほかの人にはなしつたえなどしていません。このようにたよりなく，数でもない身分でございますが，夜昼あの（お方の）おそばにおつかえ申しあげておりましたので，自然とものいきさつをもみ申しあげはじめたところ，（柏木が）お心からあまって（女三の宮を）おおもいになったおりおり，ただふたりのなかに，時たまのお手紙がかようこともございました。……

[7] では，薫が弁の尼から自分が柏木の子であるという「真相」をつたえきいて，おどろいてはなした会話にザリケリ形が使用されている。長年「ききおよばなかった」というのは，この時点まできかなかったということである。しかし，それだけなら，ザリツ形をもちいることも可能である。

しかし，ザリツ形のばあい，きかなかったという事態がこの時点で終了したということに重点がおかれることになる。換言すれば，きかないでいた事態がおわって，きいた事態がこれからつづくということである。だが，それだけでは，この会話の状況を十分に説明したものとはならない。

薫のきいた「真相」は，いまさらそれをきいたところで，あきらかにしてはならないものである。それゆえに，彼にとっては，「きいた事態」になることが従来の「きかない事態」とは外面的にはことなったものとなるはずもない。「きいた」ところで，彼はこの秘密を終生いだいていかざるをえない。ここでは，「真相」をきいたことで，うすうす感じていた「秘密」がようやくわかったことになるだけである。

この例については，ザリケリ形をもちいて，薫の「感慨」や「気づき」にあたるようなものをあらわしているとするのが，妥当な見方であろう。「ああ，やはりそうだったのだ」というような理解である。しかし，さきにもふれたように，この時点まで「ききおよばない」事態がつづいていたことをあらわしているという側面もあることに気づく。単にザリキ形では，過去の時点をしめすだけであるが，ザリケリ形のばあい，このような否定的な事態の継続的側面をあらわす表現ともなりうるとかんがえられるのである。

[8] このうきたる御名をぞ，きこしめしたるべき。さやうのことのおもはずなるにつけてうじたまへると，いはれたまはむことをおぼすなりけり。さりとてまた，あらはれてものしたまはむもあはあはしう，心づきなきこととおぼしながら，はづかしとおぼさむもいとほしきを，なにかはわれさへききあつかはむ，とおぼしてなむ，このすぢは，**かけても** きこえたまはざりける。

（「夕霧」1355–2）

（現代語訳）

この（夕霧との）ういたお噂を（朱雀院も）お耳にいれていらっしゃったはずである。そのよう

なことがおもうようでなくなるにつけて（落葉宮が）世に見切りをつけられたと，（落葉宮があれこれと）いわれになられてしまうようなことを（朱雀院は心配して）おおもいになるのであった。そうであるといってもまた，公然と（夕霧と）一緒になられるようなのもかるがるしく，感心しないことと（朱雀院は）おおもいでありながら，（こういう話は落葉宮は）はずかしいとおおもいになられそうなのもおいたわしいのに，どうしてこの自分（朱雀院）までがきいて口出ししよう（いやそれはすまい），とおおもいになって，この手のことは，決っして（落葉宮に）お申しあげにはならなかった。

[8] では，朱雀院が娘の落葉宮のことを心配している。彼女は，夕霧との関係が世間にしられてしまい，つらい立場にあって出家もかんがえている。ここで，夕霧とのなかについて「お申しあげにならなかった」というのは，心にはあっても彼女の立場を配慮すると口にだせないことであり，いままでもこれからも話題にしないことは確実なことである。

この部分は，地の文による説明でもあるため，会話文とはことなっているのであるが，語り手の立場からしても，朱雀院が申しあげられなかったというのを，ムード的に「感慨」をこめてかたっていると理解することができる。そして，物語の筋自体も，朱雀院の話はここで一段落して，つぎは夕霧の立場からの話となっている。

ただ，これをムード的な語り手の「感慨」とする以外に，もうひとつの見方として，そこから，そのような否定的な事態が継続しているという，時間的な側面もみることができる。そして，この例では，それは現時点を経過して将来もそうであると，否定的な事態が継続するであろうことも予想される。

同様のことは，3章でみた [4] での「つげたまはざりける」でも指摘できる。この例では，話し手の薫が大君に対して，「どうしておつたえにならなかったのか」と，病状を自分につたえてくれなかったことを，不満もまじえてのべている。病状がわかったのは実際にたずねてからなので，この時点でも大君は具体的に薫につたえることはしていない。否定的な事態はまだ継続していると理解される。これらの例のように，ザリケリ形には，ムード的な側面にとどまらない要素があり，否定的な事態が会話の現時点でも継続していたということをしめす例もあると理解されるのである。

[9] ……夢にもしりたまはぬことなれば，あさましうおぼして，「げにかうのたまふもことわりなれど，かけても この人々の下の心なむしりはべらざりける。げにいとくちをしきことは，ここにこそましてなげくべくはべれ。もろともに罪をおほせたまふは，うらめしきことになむ。みたてまつりしより，心ことにおもひはべりて，そこにおぼしいたらぬことをも，すぐれたるさまにもてなさむとこそ，人しれずおもひはべれ。ものげなきほどを，心の闇にまどひて，いそぎものせむとはおもひよらぬことになむ。さても，たれかはかかることはきこえけむ。よからぬ世の人のことにつきて，きはだけくおぼしのたまふも，あぢきなく，むなしきことにて，人の御名やけがれむ」とのたまへば，……　（「少女」683–11）

（現代語訳）

……（大宮は）夢にもご存知ないことなので，あきれたことにおおもいになって，「本当にこのように（内大臣が）おっしゃるのも当然のことだが，ちかってもこの人々（夕霧と雲居雁）の内心をしりませんでした。本当に非常に残念なことは，ここのわたしにとってこそ（あなた以上に）ましてなげくべきことです。ふたり一緒に罪をおかけになるのは，うらめしいことで。（わたしは雲居雁を）お世話申したときから，格別におもいまして，あなたがおおもいいたりにならないことをも，すぐれたさまに一人前にしようとこそ，内心でおもっています。まだ不十分な年齢なのを，肉親の心の闇で（かわいさにながされて）目がくらんで，いそいで結婚させようとはおもいもよらないことで。それにしても，だれがこんなことを申しあげたのだろうか。身分のひくい世間の者のことばにつられて，（内大臣が）容赦なくおおもいになりおっしゃるのも，くだらなく，根拠のない噂で，人（雲居雁）のお名がけがれてしまうかもしれない（いやそうなるだろう）」とおっしゃると……

[9] は，息子の内大臣から，孫の雲居雁と夕霧が恋人関係であることをしらされて，ふたりを世話していた祖母の大宮が，愕然としてかたった会話の部分である。「しりはべらざりける」は，いままでふたりのなかのことはまったく耳にしたことはなく，いまはじめてきいたということになる。その点からすると，いまの時点で，「しらなかった」事態は終了したことにもなる。

しかし，大宮の会話文の主旨は，自分がいままでいかに雲居雁を大事に養育してきたかであり，「しらなかった」事態から「しった」事態へと変化して，反省するなり，自分の方針をかえるといったものではない。内大臣が下々の者の噂話にのせられるのを批判し，彼の画策する雲居雁をこの三条宮からうつしてしまうということには反対であり，いままでどおり，自分の手元でそだてたいのであり，内大臣のするような性急なことでは，かえって雲居雁に疵がついてしまうと主張する。

この点からすると，「しりはべらざりける」は，「しりませんでした」という事実をのべるだけでなく，「しりませんでした」しかし「しった」その事実はどこまで信用できるのか，またそれにながされるのは問題なのではという，大宮の批判をこめてのことばと理解できる。この「しりはべらざりける」は，大宮の内大臣への批判とみずからへの多少の後悔もこめての「述懐」ともなろう。

ただし，このようなムード的な意味で［9］の例は理解できる一方で，やはり，時間的な継続の側面も無視することはできない。大宮が雲居雁と夕霧の仲をしらなかったのは，そのはじまったときから現時点にいたるまでつづいていた。そこに注目すると，この「しりはべらざりける」が，時間的に継続していた事態をもあらわしていることは明白であり，ザリケリ形の用法をかんがえるうえでも，この点は無視できないとおもわれる。

以上，［7］［8］［9］と［4］でのザリケリ形の使用例について，検討をおこなった。その結果として，ザリケリ形には基本的にその話し手の「感慨」のようなムード的な意味で使用されている可能性のたかいことがあきらかになった。

そこで，注意されるのは，［7］［8］［9］の3例にはいずれも「かけても」という，否定表現と共起しやすい副詞が使用されているということである。これは，おなじ否定表現と共起する副詞でも，単に否定を強調する意味での副詞ではなく，これら「きく」「きこゆ（はなす）」「しる」のような，心理的な活動にかかわる動詞と共起することのおおい副詞である[5]。話し手の判断的な要素とかかわりやすい副詞といえる。この「かけても」と共起しやすいことは，それだけザリケリ形がムード的な意味になりやすいということをしめしていることにもなろう。

ただ，その一方で，いま話し手がそれに気づいたという点からすると，否定的な事態が現時点にまで継続していたということも意識されていると理解できる。ザリケリ形は，基本的にムード的意味であるものの，アスペクト的な継続の意味も，結果的にしめしている例があるとおもわれる。そして，それには，［7］と［9］のようにそこで否定的事態が終了するばあいも，［8］と［4］のようにそれ以降も否定的事態が継続する可能性のあるばあいもある。

さらに，3章での［5］の「いだしたまはざりけるよ」のように，おもいかえすと，あのときは匂宮をおよびしていることを顔色にもださなかったと，過去の時点で否定的な事態であったことに，いまあらためて「気づいた」とする例もある。このばあい，否定的事態が現時点まで継続しているかどうかではなく，否定的事態が過去にあったことへの「気づき」がムード的な意味の中心となる。

このようにみてくると，事態の継続性が看取される例と事態の継続性という側面は看取されない例があることにもなる。このことは，やはり，ザリケリ形の中心的に意味するものはムード性であることをしめしている。

ただ，［5］の「いだしたまはざりけるよ」のような例はあるものの，ザリケリ形においては，話し手に関するムード的な意味と動作の継続・終了というアスペクト的な意味とは，共存しやすいようである。ザリケリ形は，単にムード性をしめすだけでなく，ザリキ形・ザリツ形ではあらわされにくい，否定的事態が継続していたという状況をしめすための語形として，その役割をになっていたとかんがえられるのである。

5　3つの語形の役割分担

3章と4章で，ザリキ形とザリツ形とザリケリ形について，その使用例の検討をおこなった。その結果，過去のある時点での否定的事態をしめすザリキ形と，否定的事態が現時点で終了したことをしめすザリツ形と，過去で否定的事態であったことを現時点で再確認してそこに話し手の「感慨」等をしめすザリケリ形と，それぞれの意味があきらかとなった。

ただし，ザリケリ形には，否定的事態が現時点まで継続していることや，以降も継続する可能性をしめす例がある。このことから，ザリケリ形はザリキ形やザリツ形ではしめしにくいアスペクト的な意味をしめす語形であるといえそうである。

否定表現のテンス・アスペクトについては，まだ不明な点がおおく，本稿では，その一端にふれたのみで

ある。今後，他の動詞での使用例もふくめて検討をすすめることにしたい。

注

＊本稿は，2006年3月25日に，西宮市大学交流センターでおこなわれた，文法史研究会での発表，「否定のザリ形をめぐって」をもとに，一部構想をあらためて，成稿したものである。研究会の席上，ご教示くださった，出席者のみなさまには，あつく御礼申しあげる。

1）調査は，上田他1996による。

2）源氏物語の引用は，池田（1953）による。その引用に際して，適宜，かなづかいをあらため，濁点をほどこし，漢字をあて，句読点をつけた。また，必要に応じて，下線や網かけを付した。

3）現代語訳は，逐語訳を基本として作成している。（　）で原文にない部分をおぎなっている。

4）鈴木（2004）による。

5）中村他（1982）副詞「かけて」の項目による。

参考文献

池田亀鑑　1953『源氏物語大成校異篇』1～3（中央公論社－引用は9版による）

上田英代・村上征勝・今西祐一郎・樺島忠夫・藤田真理・上田裕一共編　1996『源氏物語語彙用例総索引付属語篇』1～5（勉誠社）

鈴木　泰　1992『古代日本語動詞のテンスとアスペクト－源氏物語の分析』（ひつじ書房－改訂版1999）

――――　2004「古代日本語におけるテンス・アスペクト体系とケリ形の役割」（『日本語教育の視点－国際基督教大学大学院教授　飛田良文博士退任記念－』（東京堂）

高山善行　2002『日本語モダリティの史的研究』（ひつじ書房）

中村宗彦・岡見正雄・阪倉篤義　1982『角川古語大辞典』1（角川書店）

西田隆政　2005「助動詞キと「直接体験」－地の文での係り結びの用法を中心に－」（『国語と国文学』82-11）